

悲劇の町を、鎮魂と癒しの花いっぱいのに

岩手県陸前高田市

花は、私たちに癒しを与えてくれるだけではなく、時として、自然と人とのつながり、人と人とのつながりを生み出す、「社会性」のある存在。花を支える土には、震災の遺産の自然木ガレキを利用し、地域資源循環によって「花」として蘇らせ、復興に向かう町を花いっばいに彩る活動が始まっています。

再建の目途が立たない森ノ前地区

岩手県花巻市から高田街道の山道を抜け、かつて、松林で有名だった高田松原海水浴場方面へ向かうと、ふと、開墾中のような更地がひらけてきます。陸前高田市は、東日本大震災で最も被害が大きかった町のひとつ。中でも、森ノ前地区は150世帯中140人以上が津波で亡くなったと



EM堆肥の上で、じっと春を待つチューリップ

いう悲劇の地。かつて新興住宅地として栄え始めていた町は、遮る物のない、海からの冷たい風が吹きぬける更地となり、2年が経過していました。この地域は8、10mの嵩上げ予定地のため、いまだに町の再建の目途は立っていない状況です。



岩手コンポスト㈱の菅原専務(左)と紺野さん(右)



菅野さん

「花を植えたくても土がない」

この地区に住む紺野勝代さんと菅野前子さんは、「町の再建がいつになるかわからない。このまま自分たちの地域に雑草が生い茂り、荒地地となってしまうのを防ぎたい。亡くなった多くの方への鎮魂と、残された私たちの癒しの場所にするためにも、花で埋め尽くしたい！」との強い想いから、花を植えようと決意しました。

しかし、津波に土を持って行かれたため、花が植えられる土がありませんでした。残された土地の土は硬く、最初の年はくぎ抜きで線を引き、ひまわりの種を植えましたが、すぐに石が出てくる始末。なんとか咲いたけれど、やはり土が必要だと感じていました。



昨年、道路沿いを飾った花々。ここを通る方々の心を和ませました。

鎮魂と癒しの花のまちづくりへ

そんな時、震災により流出した冷凍魚介類をEMの発酵堆肥で埋設処理していた岩手コンポスト㈱(本誌11号参照)と出会い、リサイクル緑化基盤材を提供してもらえることになり、さっそく花を植えました。

震災から3年目の町には、人々の心を癒す花が咲き始めます。

津波の悲劇が、希望を彩る「奇跡の丘」に

森ノ前地区でお話しを伺った後、車を数分走らせて向かった先は国道45号線沿いの沼田地区。ここは、元小学校教諭の吉田正子さんの「花っこ畑」と名付けたオーブンガーデンが、奇跡の丘と呼ばれ、話題になった場所。

小さなころから花が好きだった吉田さん。震災前は自宅の庭を開放し、近所の人たちに花を見て楽しんでもらっていました。震災当日、夫と必死で津波から避難し、跡形もなくなった街をみて愕然。家も庭も失い、気持ち沈んでいた時に、オーブンガーデン岩手代表の吉川三枝さんと出会い「また花を通じてみんなが笑顔になる場所をつくりたい」と気持ちを新たにしました。

雑誌社の企画で、「3.11 ガーデンチャリティーをやりませんか?」という問いか



ガーデン雑誌「BIES」の特集企画 3.11ガーデンチャリティー「奇跡の丘」(2012年秋号掲載)

けに二つ返事で応え、プロジェクトがスタート。2500坪の土地にはべ2000人以上のボランティアが全国から集結。黒い波に全てを奪われた沼田地区は、プロジェクトが立ち上がった450日後に希望の花で彩られました。

「循環させる」と、私の家の柱も花の下で生きている」

「希望の丘」と呼ばれたこの丘を支えていたのは、岩手コンポスト㈱のリサイクル緑化基盤材でした。吉田さんは小学校教諭をしていた時に気仙沼の足利さん(33ページ参照)からEMを知り、ボカシづくりに熱中しました。

「野菜づくりや花づくりにEMを使うと、化学肥料や農薬を使わなくてもとてもよく育つし、EMでボカシづくりをすると手がとてもすべすべになりますよね。薬剤を使つて育てると、管理がとても簡単ですが、化学肥料は土を殺してしまうし、人にも危険。ここ(花っこ畑)では、子供が裸足で歩きまわっても、転んで土が口の中に入つても大丈夫といえる場所にしたんです。」

『3.11チャリティーガーデン』を始める前にも、ひまわりを植えていました。ただ、その時は(津波で土がなく



EMで発酵された基盤材が庭を支えています。



震災ガレキとして集められた材木の山



「宝石よりも、土の方が魅力的」と吉田さん

なつたため)土を購入せざるを得ず、高かったんです。よそで土や堆肥を見ると、いいなあ、ほしいなあと思っていました。私、ダイヤモンドよりも、土や堆肥を見た方が心が躍るんです(笑)。

自然の循環がとても大切。岩手コンポストさんのリサイクル緑化基盤材には、松林で有名だったこの土地の松が使われています。この土地から出たものをここに返す。うちの家の柱も流されてしまったけど、このリサイクル緑化基盤材の中に入っているんだと思つくと、ますます愛おしくなつてきます」。

「EMとフカヒレの町、気仙沼」をもう一度

宮城県気仙沼市

人生の中で、最も重要で、最も頼りになるのは人とのつながりではないでしょうか。人とながらに、自分自身の生き方・姿勢が問われます。

自らも被災しながら、気仙沼の復興に力を注いでいる理想産業(有)の足利英紀さん。10年、20年の友人関係の中で、漁業・農業へのEM活動をずっと続けています。



「魚食とEMのコラボレーションで普及に取り組もう!」と、足利さん(左)と菅野組合長(右)

津波で全壊した フィッシュミール工場

大津波が襲った海から、わずか数メートルに位置していた気仙沼センター水産加工業(協)フィッシュミール工場。気仙沼の水産工場から排出される残さを処理するのに欠かせない工場でしたが、津波が直撃し、工場は全壊。2012年10月に新工場が竣工し、処理された残さは、栄養価の高い肥料や飼料として販売されています。

代表理事組合長の菅野泰一さんと足利さんは15年来の友人。旧工場の時から、残さ処理の悪臭対策としてEMを活用してきました。気仙沼市内から松岩港に流れる面瀬川の浄化活動と一緒に取り組み、サケが遡上したという感動体験を共有した仲です。

魚食とEMの普及を一緒にやっていく

当工場では、EMの実績を体感しているため、新工場になった現在も、悪臭対策として側溝や加工時のEM散布が続いています。菅野さんは「自分が避難した避難所は高台にあつて、その下に悪臭を放つ倉庫があつて大変だった。その倉庫

にEMを撒いたら悪臭がなくなり、避難者たちもとても助かった。気仙沼は『魚食健康都市宣言』をしているが、なかなか進まない。魚食とEMと一緒に広めていきたい」と、足利さんに期待を寄せています。



4月に解体が始まる第十八共徳丸



ガレキの山から復活した新工場。2011年7月撮影(左) (google mapより)と2013年4月撮影(右)。



加工残さの悪臭対策にEMが活用されています。

EMで元気な苗づくりを

「自然に育っていない種を使つたって、できた野菜は本物じゃない。自然栽培で採れた種を使つて苗を育てない」というポリシーのもと、EM農業の普及にも長年携わつてきた足利さん。自然栽培の種を提供し、小野寺祐一さんに元気苗を育ててもらっています。

始めて20年のベテラン。無農薬で苗づくりをしようと思つていた頃に足利さんと出会い、木酢液や粉炭・EMを活用して苗をつくつています。足利さんとは20年以上の付き合いになるそうです。「EMで苗をつくと、育ちがいいし、何よりも、安心して食べられるのが一番です」と小野寺さん。



EMで安全な苗づくりに取り組む足利さん(左)と小野寺さん(中央)と奥さん(右)



かぼちゃ、トマト、ピーマンなど、数十種類の野菜が元気に育っていました。



気仙沼と名古屋をつないだ苗は、夏に見事な実りを見せました(2011年8月撮影)。



苗がつないだ 気仙沼と名古屋

小野寺さんの苗はとも人氣が高く、震災の年にも多くの予約が入っていました。津波によつて苗を予約していたお客さんの多くが亡くなり、苗は行き場を失つてしまいました。「せっかく小野寺さんが丹精込めて育てた苗を無駄にしたくない」と、関係先の(株)EM生活に相談したところ、なんと苗を気仙沼から名古屋まで輸送することに。

「苗が名古屋に行くとき聞いた時は信じられませんでした。輸送中に苗がダメになつてしまふのではないかと心配だったんです。足利さんがつないでくれてとても嬉しいです」と小野寺さんの奥さん。気仙沼から名古屋へ830km。EM生活の社員が100本以上の苗と共に足利さんと小野寺さんの想いを運びました。復興支援として販売された苗は、夏には多くの実をつけ、気仙沼と名古屋を結ぶ実りとなりました。